

研究課題名：生活文化・家族・心性をめぐる日米比較の学際研究

◇研究の目的・計画：

本研究は、戦後から現代に至るまで日本の生活文化・家族・心性に圧倒的影響を及ぼし続けてきた米国の価値体系を有機的に捉えることで、日本の価値体系を捉え直すことを目的に、米国のなかでも歴史的社会的文化的に日本と深い関わりを持つカリフォルニア州のベイエリアに位置するスタンフォード大学にて日米比較に基づく学際的日本研究を試みた。尚、今回は短期在外研究であり調査期間もかなり限られていただけでなく、本研究課題で扱うテーマはそれぞれが有機的な相関を持っており調査対象も広範囲に及ぶため、短期在外研究先の特性を最大限に活かす上でも、本概要報告書に記されているように、本研究課題のうちテーマを限定させる形で、現地滞在期間中にのみ可能なエスノグラフィーを中心とした基礎的調査を計画した。

◇研究活動：

まず本研究の特性上、短期在外中における実際の生活体験から得られるものは極めて多かった。2025年9月16日に米国カリフォルニア州サンフランシスコに到着してから、約半年後に帰国するまでの間に、数回引越しをすることになったため、短期間でかなりの賃貸物件を探し内見して回った。それによりベイエリアの各市、各エリアの生活環境や治安、社会階層、人種構成、経済感覚、生活文化等を様々な観点から参与観察することが出来た。またその間、家主や近隣住人、そのエリアに短期・中期・長期（三世代で住み続けているケースも含む）で生活している人々との関わりを持つことが出来たことも本研究の一助となった。加えて自身が幼少期から家族ぐるみで交流を持ってきた、ベイエリアでの旧知の米国人らをはじめ、スタンフォード大学を中心としたアカデミアのネットワーク等の恩恵を得なければ短期間での基礎的調査は不可能であった。更に、本調査研究に協力して下さったローカルの人々も、AI 創業者、会社経営者、研究者、大学関係者、弁護士、医師、元米国政府高官、テック系スペシャリスト、バイオ・テック系創業者、VC（ヴェンチャー・キャピタリスト）、コンサルタント等の専門職から、不動産ビジネス、牧師、大学院生、大学生、主婦、美容師、料理店経営者など多岐にわたる。日々多くのインフォーマル・インタビュー並びに参与観察を行ない、プライバシーが担保される範疇で家族、人生観、キャリア観、世界観に関する話も伺った。同時に、短期在外研究中は、スタンフォード大学等での各種セミナー・シンポジウム・学術イベントにも参加し、各分野の専門家らに本研究の学際的アプローチに関する助言や意見交換等も積極的に行なった。

◇研究成果：

約半年間の現地調査を通じて、本研究課題に関連し、以下の三つの特徴が見てとられた。以下はその概要であり、本概要報告書に示された内容の具体的な分析及び詳細な論理展開については現在、単著論文として起稿準備中である。

第一に、この約半世紀以上、1950年代後半以降の半導体産業からAI 研究開発に至るまでテック産業に特化し、世界を牽引し続けているシリコンバレーは、かつてない速さと資金規模で激しい競争が繰り広げられているが、それが、如何にその地に生きる人々の暮らし・人生・

世界観にも深く根ざしたシステムや価値体系となって人々の生活文化・家族・心性をも形づけている諸相が、本調査において実証的に確認された。事実としてサンフランシスコ・ベイエリアは、グローバル・テック企業の躍進を背景に世界で最も富が集中する経済圏の一つでありながら、またそうであるだけに、極端な富の偏在が住宅価格をはじめとする急激な生活コストの高騰を招き、残酷なまでの経済格差を進行させ、高度専門職層にも過度の競争ストレスが常態化している。同様に、当地の高校生が直面する、親や周囲環境のエリートイズムと熾烈な競争で生じる精神的重圧も、数十年前から社会問題として顕在化してきた。

19世紀半ばからのゴールド・ラッシュに見られるように、もともとリスクを恐れず新天地を拓く投機的な気風と開拓精神から発展したカリフォルニアは、「アメリカン・ドリーム」の風土的精神を見事に体現させたかのように、北カリフォルニアの技術革新並びに南カリフォルニアのハリウッドを中心とした娯楽産業のマテリアリズムによって、カリフォルニア州単体で世界5位のGDPに至るまでの富の一極集中を更新している。同時に、マテリアリズムと巨万の富を一貫したアイデンティティの構成要素とさせながら、階層と年齢を問わず人々の精神的弊弊が深刻化している実態から見ても、極限までの富と競争がもたらす人間社会への歪みとその限界を指し示す地としての一面を持つ。何事にも日米の構造的文化的差異があれども、そこには本質的には戦後日本社会や家族が直面した問題に通ずる問いに共鳴したのがある。

第二の特徴として、過度なマテリアリズムの追求と繁栄をシンボルとしながらも、同地には1960年代のカウンター・カルチャーの系譜を引く、自然回帰思想や精神性を重視する歴史的・社会的土壌が存在する点である。これは単なる既存秩序への反発に留まらず、伝統的な西洋文明の価値体系に対するオルタナティブ（代替案）の模索であり、独自のライフスタイルや新たな産業形態を創出する文化的基盤となってきた。特に、この精神的潮流の変容と、同地の環境主義や生活思想との有機的な関連性における日本文化の立ち位置についても、本研究における重要な考察対象となった。

第三の特徴として、上述した外面的な物質至上主義と内面的な精神性の追求が交差・融合を遂げ、現代の資本主義の枠組みにおいて独自の発展性（パラドクス）を有していくプロセスが挙げられる。最先端の技術革新と巨万の富が一極集中するシリコンバレー周辺において、人々の暮らしや世界観の底流に独自の心理的・精神的諸相（虚無や不安、あるいはそれらへの対抗手段としてのマインドケア等）が頻繁に観察されていった点は、日米の比較文化論的視点からも極めて有意義な問いを提起している。

従って、これを筆者は「カリフォルニア・パラドクス」と名付けるに至った。元々カリフォルニア・パラドクスとは、経済・インフラ・公衆衛生などの構造的矛盾を示した表現として使われてきたが、ここで筆者が「カリフォルニア・パラドクス」と名付けた所以は、莫大な富並びに最先端の技術革新が一極集中するこのシリコンバレーにおける人々の虚無と不安にある。

カリフォルニアの物質至上主義と虚無は全米でも記号化され、様々なメディアで描かれてきたが、だからといって、ここで暮らす人々個々人の幸福観を一般化するつもりはない。事実、今回の滞在期間中、日々の生活に充足感を持って生きている人々にも多く会った。実際、筆者の関わった多くがライフスタイルとしての豊かさを享受する人々であったと言える。しかし、カリフォルニアの象徴とも見なされる Positivity に溢れた思考行動や人生観には、独特の虚無や不安がしばしば表現されていたこと、さらにローカルの人々はそれぞれの視点から、この地域

特有の社会病理について繰り返し言及していたこと、そして、その社会病理から脱却するかの如く、様々な文脈から日本の価値体系をめぐる発展的可能性が見出されたことも、本研究課題を遂行するにあたり極めて重要な示唆となったからである。

このシリコンバレーにおける最新のテクノロジーとウェルネス資本主義をめぐる精神史の詳細も追って論文等で発表していくが、当地の人々の暮らしや人生、そして世界観に大きな影響を及ぼすこの土地だからこそその風土と潮流は、言うまでもなく、日本社会はもとより、グローバルな規模で人間社会にインパクトを及ぼしており、それによる社会病理も同様であることは、スマホやSNSによる脳機能・心身の健康被害や対人関係などの社会的トラブルの深刻化から見ても明らかであり、本調査で浮き彫りになった社会病理をめぐる考察にとっても有益な示唆を得ることができた。更に、本研究が着目した点は、社会構造をめぐる諸問題だけに留まらず、人間及び人間社会の本質的理解への視座にも通じている。即ち、富とエゴを極限まで肥大化させることの「自由」が許されたこのシリコンバレーで、人々はどれだけ資本主義の構造的支配から「自由」になれるのか。火星移住計画や不老不死、AIとヒューマノイドへの巨額投資と研究開発が競い合われている先に「支配」からの自由は存在し得るのか。テクノロジーの最先端に、そして富と競争の果てにあるとされる幸福と豊かさとは一体何なのか。

短い現地滞在期間中に調査できることは限られるが、地球の運命さえも支配するかの如き特異性を持ったこのシリコンバレーにおける生活文化・家族・心性をめぐる諸相を捉えることは、日米比較文化論的視点からも極めて有意義な試みとなるだけでなく、当地の諸相分析から日本社会における未来の一端を捉え、日本から当地における未来の一端を捉えることも可能であると考えられる。特に、当地において日本の生活思想や価値体系がなぜテック・リーダーや富裕層たちに大いなるインスピレーションを与えてきているかを論理的に捉え明らかにしていくことは、これからの資本主義的世界の行方と人類の幸福のありかにおける日本文化の貢献を探る上でも有益な視座となるのではなかろうか。

◇今後の展望・教育効果等

以上の基礎的調査を経て、筆者は、帰国の2日前に当たる2026年3月7日に、JASS (Japanese Academic Seminars at Stanford) にお招き頂き、「カリフォルニア・パラドクス試論：富と競争と幸福のエスノグラフィーが映し出す日米の鏡像」(“Toward ‘The California Paradox’: A Mirror Image of Japan and the U.S. through an Ethnography of Wealth, Competition, and the Pursuit of Happiness in the Bay Area”) を講演した。その上で、現在は本調査研究で得た初期的知見に基づき、単著論文等として発表準備中である。

加えて、筆者が2015年から時事通信社『金融財政ビジネス』にて不定期連載をしている「ジャパン・コード」にて、当地での調査研究に関するエッセイを複数発表した他、社会活動として音声メディアにて発信を行い、ウェブ・メディアにも掲載準備中である。本調査研究を通じて得た知見やネットワークは、日本社会をグローバルな視点から多角的に捉え直す上で、日本表象文化論 A/B に有益だけでなく、日米比較を基軸に様々な社会的文化的事象を扱う演習 A/B/C/D、国際日本学特別演習 A/B への教育効果も期待できる。また、本調査研究は、上述したように日本の価値体系のグローバル展開をめぐり、日米における社会実装型のプロジェクトへと発展させうることも考えられるため、各分野の専門家らの助言や協力を仰ぎつつ、産学連

携の形でも実装に向けた更なる研究の可能性を模索している次第である。